

第四章では「羅唐戦争の構造と決定的戦略」と題して新羅が唐に対して勝利した戦略的な要因を追究した。先行研究の多くは新羅の勝利は西域情勢の急変によって唐が新羅征討を中断せざるをえなくなったという消極的な要因によって捉えてきた。しかし、新羅の主體的な戦略が羅唐戦争において反映されなかったと捉えるのはあまりにも新羅の主体性を無視した見方であり、現実性に欠けている。そこで羅唐戦争中の両国の軍事行動・外交交渉の因果関係を整理し、新羅のいかなる戦略が決定的な勝因となったのかを分析した。

そもそも西域情勢の変化は羅唐戦争が長期化したために引き起こされたと考えられる。この西域情勢の変化とは吐蕃の勃興と唐に対する侵入のことであるが、羅唐戦争に軍事的人材が多く動員されていたため、唐は吐蕃に対する対応が十分にできなかったと見られる。

次に羅唐戦争の長期化は百済故地の帰属が唐から新羅に移っていたことに要因を求

められる。百済故地は交通の要衝であり、中国大陸とは歴史的に水路で結び付いていた。遠征軍である唐軍は補給路としてこの水路を利用していった形跡があり、百済故地は戦略的に重要な拠点であった。ここを失ったことで羅唐戦争は泥沼化したのだろう。

この百済故地を占拠する際に新羅の主體的な戦略が実在し、羅唐戦争の決定的な戦略になった。すなわち、新羅が高句麗遺民を支援するという戦略である。新羅は高句麗遺民の反乱が唐によって鎮圧される六七年までに高句麗遺民の反乱を積極的に援助することによって唐の征討軍の主眼を高句麗遺民の反乱の鎮圧に向けさせて、その間に百済故地の占領を進め六七年二月頃までには完了させる。唐の征討軍が新羅軍と直接的な決戦を行ったのは六七年十二月になってからであり、この頃には百済故地は新羅の手に落ちていた。このように高句麗遺民の反乱を支援するという新羅の主體的な戦略が羅唐戦争において極めて有効的であったことは当時の紛争地域の考証に

よって裏づけることができる。

以上のように、本論文では羅唐戦争の実態を両国の政治的目的、戦争の期間、戦争の経過及び戦略の分析を通じて明らかにし、併せて西域情勢との関連性を分析することによって羅唐戦争が国際情勢といかに結び付いていたかを跡づけた。

#### 〈西洋史学専修〉

ハインリヒ六世の  
ノルマン・シチリア王国征服

宮本 園子

はじめに

古代ローマ帝国の継承者として、「皇帝」の称号を自負し続けた中世のドイツ皇帝にとってイタリア全土の支配は夢であると同時に、従来の皇帝理念から果たされるべき義務でもあった。そしてまた、当時のイタリアは、地中海貿易で非常に栄えた土地であり、経済という現実的な観点からもドイ

ツの歴代皇帝にとって非常に魅力的な土地でもあった。そのためイタリア政策の名で知られるように、多くの皇帝がイタリアの地を目指した。しかし、結果としてイタリアの支配を確立することは出来ず、あくまでも皇帝の理想論にとどまっていたのが当時の実状であった。この皇帝としての従来義務を果たし、夢を叶えるべく、そして皇帝政策を更なる高みへと導くために、従来には無い方法でイタリアの地へと乗り出したのは、シュタウフェン朝のハインリヒ六世であった。

本稿では、これまであまり取り上げられてこなかったハインリヒ六世の皇帝政策について、彼の代表的政策であるノルマン・シチリア王国征服を通じて考察する。何故ハインリヒ六世はノルマン・シチリア王国を征服したのか。この征服における彼の真なる狙いは一体何であったのか。

この問いに対しての解答を、つまり征服の根拠を、筆者は大まかに名目的、実質的といった二つの要素に分類した。一つは建

前とでも言うべき、ハインリヒ六世の妻であり、ノルマン・シチリア王女でもあるコンスタンツェの正式な相続権である。そしてもう一方は、本稿で最も重点を置いた部分であるが、建前とは正相反な実質的な理由、教皇との関係、経済や十字軍など、皇帝政策を有利に進める上での必要条件たる理由である。

名目的な理由―妻コンスタンツェの相続権―

コンスタンツェの相続権は、単にコンスタンツェ自身が当時のノルマン・シチリア国王であるグリエルモ二世を除いて、オートヴィル王家の唯一の嫡子であったという理由から発生したものでは決してなかった。彼女の相続権は王国内での親族による反乱や、帝国ドイツ、教皇、ビザンツ帝国といったノルマン・シチリア王国内外の情勢によって生じたものであった。このため当時の情勢の如何によってこの相続権は変化し、常に不安定なものでしかなかった。事実、一八九九年にグリエルモ二世が死去した際、

この相続権通りに王国がコンスタンツェとその夫であるハインリヒ六世に帰属することとはなく、王国を手に入れるためにハインリヒ六世は、軍事的手段に訴える他なかったのである。ノルマン・シチリア王国への遠征を「侵略」と見なされなかったために、つまり軍事的な行動を正当化するためにハインリヒ六世はコンスタンツェの相続権を正式な理由として掲げたのであった。

征服の真の理由とは

では本題に戻ろう。ハインリヒ六世がノルマン・シチリア王国を征服した本当の理由は何であったのか。当然、この征服は皇帝のドイツ国内における長期不在、遠征のための莫大な資金確保や教皇との軋轢など、様々な点で非常に多くの危険を孕んでいた。王権の弱いドイツにおいて国王の海外遠征での失敗は王朝の崩壊を意味する。事実、一回目の遠征が失敗した際、ドイツ国内において、諸侯達がイングラント王の援助を受けて反皇帝同盟を結成し、ハインリヒ六

世自身窮地に追い込まれている。にもかかわらず、ハインリヒ六世が最初の遠征の失敗を乗り越え、再び征服を実行したのは一体どういう理由からであったのか。この理由にこそハインリヒ六世の皇帝政策としての意図を見出せると筆者は想定した。

本稿ではこの推定を立証するために、以下の四つの観点から考察を試みることにした。一つ目は皇帝と教皇との関係、二つ目はシュタウフェン朝の経済的事情、三つ目は十字軍、そして最後に四つ目として十二世紀当時における国際情勢について、以上の四つである。

### 皇帝と教皇の関係

皇帝と教皇の関係について以下の四つの事柄に焦点を絞って述べる。叙任権闘争に代表されるように教会支配をめぐる対立、ドイツ王位継承の際の助言と承認による教皇の影響力、皇帝位授与の際皇帝の教皇に対する譲歩、そして最後に教皇の国内統治への介入、この四つである。これら諸

問題を解決するためにハインリヒ六世は従来の对教皇政策である対立教皇を用いるのではなく、ノルマン・シチリア王国を征服することによって北は帝国、南は征服した王国領、という様に教皇国家の南北包囲によって教皇を完全に皇帝の手中に収めることを目指したのである。つまり、王国を征服することで教皇に圧力をかけ、皇帝による教皇支配の体制の確立を試みたのである。

### シュタウフェン朝の経済的な事情

当時のドイツ王権は王朝と同等、もしくはそれ以上の力を保持した国内の諸侯達に打ち勝つために、経済力に裏付けされた力を獲得せねばならなかった。そのためにヴォルムス協約前では帝国教会政策を推進し、そしてこの教会政策が一一二二年を境に破綻し始めると、帝国領国政策を行って国王の支配領域を拡大して経済力の確保に努めた。しかし、経済力の基盤である、所領の拡大は散在的な所領を持つシュタウフェン家にとって非常に困難なものであった。こ

のようなドイツに対して地中海の中央に位置し、中継貿易地として商業が栄えていたノルマン・シチリア王国は同時に豊かな穀倉地帯でもあったため、非常に高い経済力を持つ魅力的な土地であった。更にこの王国は国王自身の力が比較的強く、国王以外の諸侯達が強いドイツとは異なり、一度征服すれば今までにない安定した経済力を得られる可能性が多分にあった。

### 十字軍のためのノルマン・シチリア王国征服

十一世紀末から開始された十字軍により十二世紀では聖地への巡礼が非常に盛んであり、聖地を奪回することこそがキリスト教世界における頂点へと導く風潮があった。頂点に立つために、つまり教皇やその他の国の王（フランス王やイングランド王）達に対して優位を確立するために、ハインリヒ六世は皇帝主導の十字軍を計画したのである。そしてこの皇帝主導の十字軍計画を成功させるためには、これまで帝国が主戦力としてこなかった艦隊を持つことが必須

条件であった。艦隊を持たない帝国は、これまでの十字軍においてその都度、イタリア諸都市に協力を要請せねばならず、イングランドやフランスの王達に常に遅れをとっていたのである。そしてイタリア諸都市への艦隊の協力要請もまた、これらの地域に対して交渉と譲歩を行わなければならず、イタリアにおける皇帝の地位の低下を招くものであった。このため、強力な艦隊を持つという点からも、そして地理的位置故にイタリア諸都市に対して牽制をかけられるという点からも、ノルマン・シチリア王国はハインリヒ六世にとって大変魅力的なものであった。

## 十二世紀における国際情勢

十二世紀は十字軍により触発された聖地周辺の地域が（例えばキプロスやアルメニア等）、旧来のビザンツ帝国の支配から脱し、新興勢力として台頭した時期でもあった。そして、この新興勢力が台頭する際に必要としたのは、従来の支配者より強大な

力を持った保護者であった。このため、イングランドや教皇といった西欧の勢力は地中海東岸地域への進出のために、当然この機会を利用した。先ず、イングランド王リチャードがレーン封主としてキプロスを押さえたように、そして教皇がヨハネ騎士修道会を配下に置き、聖地周辺の土地を管理させたように、帝国もまた、皇帝勢力拡大を成功させんがために、アルメニアやキプロスに手を伸ばしたのである。このようにヨーロッパの各勢力が地中海周辺の地に狙いを定めて闘ぎ合っていたこの時代、ドイツが他の勢力に遅れをとらないために、ハインリヒ六世はノルマン・シチリア王国征服を行って地中海進出への足掛りとしたのであった。

## おわりに

以上のように様々な観点からハインリヒ六世のノルマン・シチリア王国征服を概観してきた。この考察の結果から言えることは以下のことである。ハインリヒ六世は従

来から様々な問題を抱えた教皇との関係に、軍事的な南北包囲網によって皇帝の教皇に対する絶対的な優位を確立させて、終止符を打とうと試みたのである。そして経済の観点からも国内での王家の経済基盤の脆弱さを乗り越えるために、長期的な国内での所領拡大の政策ではなく、敢えてノルマン・シチリアという王権の強い、そして比較的官僚制の整った性格を持つ地を征服して、新たな経済力を確保するという短期決戦に臨んだのである。そしてキリスト教世界における首位を確立するために十字軍を主導し、この十字軍を成功させるために西欧諸国が聖地へ向かう際に使用する中継地であり、かつ強大な艦隊を保持していたノルマン・シチリア王国を征服したのであった。そして最後に、十字軍によって地中海を中心とした国際交流の隆盛が見られた十二世紀にあって、帝国がその他の大国であるイングランドやフランス、そしてイタリア諸都市や教皇といった諸勢力に遅れを取らず、優位を確立するためにこの王国を征服して

地中海への進出の拠点としたのであった。

何故、ハインリヒ六世はノルマン・シチリア王国を征服したのか。それはこれまでに述べたように、この征服こそがハインリヒ六世自身によって生み出された新たな皇帝政策だったからである。従来の皇帝政策のように北イタリアばかりに着目して一進一退を繰り返すのではなく、ローマという教皇の地を一步越えて、ノルマン・シチリアの地を獲得することで従来から歴代皇帝が苦悩した諸問題に決着をつけ、さらに将来における帝国の国際的な地位を確立させようとしたのであった。この過去と未来の問題に対処すべく、ハインリヒ六世はノルマン・シチリア王国を征服したのである。ノルマン・シチリア王国征服は単なる征服だけにはとどまらない、従来において類を見ない新たな皇帝政策であったと言うことが出来るだろう。

# 〈考古学専修〉

## 環南シナ海における

### ネフライト製装身具の展開

深山 絵実梨

〈はじめに〉

卒業論文でネフライト（軟玉）製の装身具について考えることになった端緒は、東南アジアの広い地域から同様の形状を持つ耳飾りが多数出土している事実に驚いたことにあった。それらの遺物について調べていくうちに、その連続性や関連性について、戦前から戦中にかけて活躍した日本人考古学者鹿野忠雄が先駆的な研究を実施していたことを知った。しかしその研究は現在まで生かされていない。そこで卒業論文では鹿野の研究から再出発し、現在までに得られた遺物の情報を基にしながら、ネフライト製装身具とくに耳飾りの系統的展開について再検討を行うことを目的とした。研究対象とした地域はベトナム、フィリピン、台

湾、時代は新石器時代の終わり頃から初期鉄器時代(1500BC～AD100)までを扱った。

# 〈先行研究〉

まず、鹿野忠雄が一九四六年に発表した論文「東南亜細亜における有珧状石輪」について再検討した。このなかで鹿野は、台湾出土の珧状耳飾りの原型が、ベトナム北部に分布する鉄器時代のドンソン文化の青銅製有角珧輪であると主張している。さらに鹿野は、突起を有する珧状耳飾りを、その突起の形状から四種類に分類し、型式学的考察のもとに耳飾りの発展・変化を以下のように論じた。(表1参照)

ドンソン起源の有角珧状石輪が、人の移動により台湾本島及びベトナム北中部のドンホイ地域に伝播。ドンホイ地域において突起が第一型式から第二型式へ変化し、さらにベトナム中部のサーフィン地域へ南下。サーフィン地域で突起が第三型式へと変化する。サーフィン地域から南シナ海を越え、フィリピンのボタンガス地域、さらに台湾